台風22号・23号の

復旧・復興を支えた 現場の力

special interview

台風22号・23号の影響により、私たちの町は大きな被害を受けました。その中で、昼夜を問わず復旧・復興に奔走してくださった方々がいます。町民に最も近い場所で私たちの暮らしを守り、支えてくれたその姿に、どれほどの人が勇気づけられたことでしょう。今回は、そんな"八丈町のために動き続けてくださった方々"にお話を伺いました。

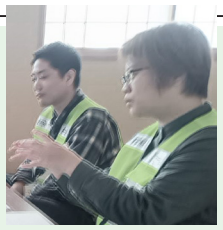
Q1 今回の災害派遣ではどのような支援を中心に実施しましたか？

Q2 今回の支援で特に大変だったことはありますか？

Q3 支援を行う上で、大切にしていたことは何ですか？

Q4 印象に残った出来事はありますか？

Q5 最後に八丈島の皆さんへメッセージをお願いします。



東京DWAT（東京都災害派遣福祉チーム）・東京都社会福祉協議会

DWATチーム員／特別養護老人ホームあじさいの里 施設長 吹田 伊都子さん
DWAT事務局／東京都社会福祉協議会 福祉部 経営支援担当　高橋 和希さん

Q. 東京都としてDWATが派遣されたのは今回が初めてですか？

東京都単独での派遣は今回が初めてでした。今年（令和7年）、災害救助法が約60年ぶりに改正され、DWATの支援対象が避難所だけでなく在宅避難者にも拡がったことで、全国的にも注目される活動となりました。島の方同士では話しにくい被災体験や不安を、外部の支援者である私たちに打ち明けてくださることも多く、そうした声が必要な支援へつながっていったと感じています。

A1 被災したご家庭を一軒ずつ訪問し、生活状況や困りごとの聞き取りを行う「個別訪問」が中心でした。福祉的な支援が必要と判断した場合は、情報を整理し役場などにつなぐ"橋渡し役"も担いました。多い日には1日50件近くを訪問することもありました。

A4 歩いているだけで「ありがとうございます」と声をかけていただくことが多く、島の皆さんの温かい受け入れを強く感じました。近所同士が互いを気にかけ、「あのお宅が心配だ」と教えてくださる場面も多く、地域の支え合いの力がとても大きいことを実感しました。「うちだけじゃないから」と周囲を思いやる声も多く、お互いをよく見守りながら支え合う関係性が深く印象に残っています。

また、ある地域では、災害後に「隣も大変だから」と太鼓サークルの活動を控えているという方にもお会いしました。DWATチーム員が「楽しいことをして町を元気にすることも大事ですよ」と伝えたところ、住民の方も大変喜ばれていました。遠慮があって言い出せなかった本当の思いがあったのだと感じています。

A5 **高橋さん**　今回の災害支援で初めて八丈島に来ました。正直、個人的にも思い入れのある特別な島になりました。次は絶対にプライベートで来たいと思っています！
DWATの活動は11月29日までにはなりますが、オンライン等で出来る部分は積極的に関わり、支援を続けていきたいと思います。

吹田さん　町民の方々、そして連休中にも関わらず動き続けていた行政職員の皆さんが尽力されている姿を間近で見ていました。１日でも早く災害前の生活ができるようになってほしいと願っています。

国土交通省関東地方整備局

国土交通省　関東地方整備局 防災情報調整官　吉永 勝彦さん

A1 TEC-FORCE隊員として、主にドローン班（延べ4班）と道路班（延べ8班）の派遣でした。道路班は町道の被災箇所を一つずつ確認し、その被害規模をもとに復旧工法に関する技術的所見や概算被害額算定書、概算被害数量算定書などの作成を行いました。ドローン班は当初、水源地周辺の土砂崩れや倒木の状況を確認する任務でしたが、追加で道路班が立ち入れない場所は上空からの調査支援も行いました。

A2 現場の報告によると、ドローン班は樹木が多いため上空からの確認が難しく、強風の影響で操縦の難易度が高かったです。道路班は倒木や土砂崩れの影響で徒歩で被災箇所に向かうこともあり、島内の狭い道が多い中、レンタカーには軽自動車を選択したことが正解でした。

A3 被災者への配慮を徹底し、住民の方への声掛けを欠かさないことを意識しました。さらに、隊員自身が負傷しないよう、班長を中心に安全管理と体調管理も重視して活動していました。

A4 島民の方が危険箇所を教えてくださったり、ドローンの発着場所を快く貸してくださったことが印象に残っています。また、災害後も運動会が開催されている様子を見て、復興に向けて前向きに進む島の力強さを感じました。

A5 一日も早い復興を心から願っています。支援に来た隊員の多くが、次は観光で訪れたいと話しており、また元気な八丈島に戻って来られる日を楽しみにしています。

東京都建設局

東京都　西多摩建設事務所 工事第一課 統括課長代理　湊 勇人さん

A1 今回私は、このたびの台風22号および23号で被害を受けた町道について、八丈町が国に申請する災害査定業務の技術的支援として八丈島に入りました。被害箇所を確認し、図面作成や写真整理などを行うとともに、復旧に向けた工法の提案や復旧費用の積算を行い、被害申請に必要な業務を担当していました。

A2 町道は400キロ以上あり、入り組んだ場所も多いため、被害箇所や細かな位置をTEC-FORCE（国土交通省の緊急災害対策派遣隊）の資料と照らし合わせながら探し出すのがとても大変でした。特に台風後は通り抜けができない道も多く、一つひとつ確認しながら調査を進める必要がありました。

A3 被害現場に向かう仕事ですので、何より「安全第一」を徹底していました。自分がケガや体調不良で倒れてしまえば、八丈町の皆さんに迷惑をおかけしてしまうことになります。また、町役場建設課の職員の方々が少しでも休めるよう、これまでの5人体制から派遣を9名へ拡充し、滞在期間は全力で支援に取り組んでいました。

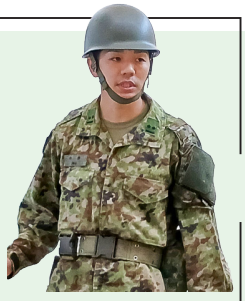
A4 被害現場を調査中でのことですが、現場近くに住む島民の方から、台風時に道路が壊れていく音や、当時感じた恐怖を詳しく教えていただきました。そうしたお話は、実際の被害範囲を判断するうえで非常に参考になり、大変助かりました。被災時の状況を身をもって経験された方々の生の声は、国への災害査定でも説得力があるものであり、しっかりと伝えさせていただきます。ありがとうございます。

A5 八丈島の皆さんは、島への愛着と誇りを強く持っておられると感じました。私たちは、被害前のあたり前であった日常が一日でも早く戻るよう、技術者としてできる限りの支援を続けていきたいと思っています。

また、毎日朝早くから深夜まで対応を続けている八丈町の職員の姿を拝見し、そのご負担を心配しています。

安全に道路が通れるまで、しばらくご不便をおかけするとは思いますが、どうか島民の皆さんも「安全第一」「健康第一」でお過ごしください。少しでも皆さんのお役に立てるよう、引き続き尽力してまいります。

陸上自衛隊「給食班」



第１後方支援連隊 本部付隊 運用訓練幹部 ２等陸尉　今井 一夢さん

A1 生活支援隊給食支援班として、被災された島民の方々に対する給食（炊き出し）の支援をしました。併せて、見学に来られた方に対して給食作成を行う炊事場の案内や装備品の説明等を行い、自衛隊の活動の一端を紹介しました。

A2 使用する食材の調達をニーズに応じて行政の方々と逆算して行う調整が最も大変だと感じました。天候によって輸送船が欠航する状況が生起する中、給食支援が必要な時期に必要な量を確実に提供するため、先行的な情報収集及びニーズ把握が不可欠であり行政の方々との綿密な打ち合わせが重要であるということを痛感しました。

A3 １点目は「被災された方々に寄り添った支援の実施」です。ただ給食を作成し、事務的に渡したり、支援する側と支援される側で隔てるのではなく、同じ日本人としてできうる最大限の支援を行うとともに、配布の支援を通じて被災された島民の方々の心情に寄り添い、１日でも早い復興の一助となれるよう班員を含め徹底しました。２点目は「衛生管理の徹底」です。緊急時とはいえ、食中毒等の発生は絶対に起こしてはならないという強い意志の下、結節時における手洗いうがいの励行、ヘアーキャップの装着、食品の温度管理等を徹底し、安全な給食支援を実施しました。

A4 10月17日に実施した大賀郷園地における配布支援において、島民の男の子から感謝の気持ちを込めた絵を頂きました。我々の活動に対する理解と、必要とされているという実感が沸き、じ後の活力となりました。

A5 本派遣任務の１週間前、令和７年度八丈島防災訓練における炊き出しのため、八丈島を訪れました。風光明媚な島の風景、島の名産である「ネリ」「明日葉」「焼酎」や「島寿司」、そして温かい人柄に触れる機会を頂き、短い時間でしたが魅力と活力にあふれる八丈島がとても好きになりました。その矢先の災害派遣であり、小職にとっても初めての任務ではありましたが島民の方々の復興の一助となれれば幸いです。必ずまた八丈島に、次はプライベートで行きます。この度の台風被害により被災された方々におかれましては１日も早い復興と平穏な生活に戻れることをお祈り致します。

東京都主税局（家屋調査）

東京都主税局　北都税事務所 固定資産税課 土地班　小林 光雄さん

A1 私を含めて10名の東京都職員が家屋調査の第一陣として、10月17日から24日まで台風被害を受けた住家の家屋調査を担当しました。罹災証明書を発行するための前段階として、申請のあったお宅を訪問し、外からと家の中の両方を確認しながら被害状況の調査に従事しました。

A2 10名の大半が過去の別災害で調査経験がある即戦力として派遣されましたが、地震災害とは異なる風水害による建物被害において、国が定める指針にあてはめることが難しいものがありました。八丈島特有の建物事情も考慮して、防災の専門家や町役場の担当者との間でミーティングを重ね、調整しながら八丈島に合った調査スタイルを確立することが大変でした。

A3 国の定めた指針を実際の災害に合わせることの必要性を考慮し、地域や建物の特徴や被害特性を捉え、臨機応変に柔軟な判断をして道筋を立てることが我々第一陣の役目と考えました。統一の判断基準を作るため、毎朝夕のミーティングで事例を持ち寄り、「このケースはここに当てはめよう」と共通認識を積み上げていきました。また、調査にお伺いした際に片付け済みや応急修理で見

陸上自衛隊「入浴支援班」

第１後方支援連隊 補給隊 業務小隊長 ３等陸尉　川井 友貴さん

A1 樫立向里温泉「ふれあいの湯」の源泉を使わせていただき、八丈島の皆様に、入浴支援をしました。ふれあいの湯の浴槽の中に、自衛隊の装備品である、野外入浴セットの浴槽を組み立て、かけ湯として、体を洗いやすいように準備しました。また、源泉が５８度と高温であり、海上保安庁の船や消防本部から取水した水を加水して温度調整をしました。

A2 大変というより、今回の支援で工夫（意識）した点は、貴重な水の使用を抑えることです。温度調整に使用する水の使用を抑えるため、源泉を少しずつ入れ、冷ましながらの湯入れ、湯もみをして温度を下げる等の工夫し、支援を実施しました。

A3 私たちが支援を行う上で大切にしていたのは、八丈島の皆様とのコミュニケーションです。台風の被害で、苦労されている八丈島の皆様に心身ともに温まってもらえる場所となるように、会話を通して、皆様の思いを聞き取り、より良い支援ができるように努めました。特に皆様からの声が多かったのはあがり湯でした。断水でシャワーが使えず、塩分の強い温泉成分が体に残りべたべたする状態でしたので、真水によるあがり湯をペットボトルで準備し、皆様のご要望に可能な限り応えて、支援をしました。まさに私たちと八丈島の皆様とのふれあいの上で成り立った支援だったと感じています。

A4 八丈島の皆様とのかかわりの中で、「ありがとう。」や「ご苦労さま」、「気持ちよかったよ」等たくさんの温かいお言葉をもらいました。また、幼い子供たちから、「将来、自衛官になる！」という言葉を聞いた時には、背筋が伸びる思いでした。

A5 八丈島の皆様、約１か月間お世話になりました。台風被害を受けた困難な状況の中でも、復興に向け一歩ずつ力強く歩まれている皆様の姿に触れるたび、むしろ私たち自衛官が勇気をいただき、支援を遂行する力をいただいているように感じました。また、暖かく穏やかな八丈島の皆様と接する中で改めて、自衛官としての使命と責任を胸に刻むこととなりました。私たち自衛官は、国民の平和な生活を守るため、日々訓練を重ね、全身全霊をもって自衛官としての使命と責任を果たしてまいります。今回の皆様との出会いも、じ後の活動に生かし、任務完遂に邁進してまいります。

八丈島の皆様、ありがとうございました。

えにくくなった被害については、住民の方の聞き取りや写真を手がかりに、見落としがないよう努めました。

A4 島民の方々から、あの台風当日の話を生の声で伺ったことです。「急に風が変わって屋根が飛んだ」「朝まで何もできなかった」といった言葉から、ニュースだけでは分からない緊張や不安が強く伝わってきました。そんな状況でも、「ご苦労さまです」と声をかけていただくことがあり、その温かさに胸を打たれました。

A5 台風から時間がたった今も、住宅の片付けや道路・インフラの復旧は続いており、元の暮らしに戻れていない方も多くいらっしゃると聞いています。東京都の職員はもちろん、町役場や関係機関の皆さんが、今も全力で復旧・復興に取り組んでおられます。１日でも早く、八丈島全体に穏やかな日常が戻ることを心から願っています。今回の派遣で初めて八丈島を訪れましたが、とても魅力のある島だと感じました。状況が落ち着いたら、ぜひ今度は一人の旅行者として、八丈島の良さを改めて味わいに伺いたいと思っています。